

吹田市埋蔵文化財発掘調査報告集 2

朝日町遺跡第 1 次調査

元町遺跡第 1 次調査

平成 25 (2013) 年 3 月

吹田市教育委員会

序

吹田市では、これまでに文化財保護事業として数多くの埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。それらの発掘調査は、数平米の小規模なものや数千平米の面積を調査対象とする大規模なものなど形は様々ですが、そこで得られた成果は、吹田市の歴史・文化を知る上で貴重な資料となります。

本市では、このような発掘調査の成果を市民のみなさまへ情報発信するために、博物館での展示や講座、発掘調査現場での説明会の開催など、様々な活動に取り組んでいるところですが、なかでも発掘調査の報告書を刊行することが調査成果を公にするという点で重要な取り組みとなります。本市では、現地での発掘調査終了後、調査資料の整理を行い、随時報告書の刊行に努めており、本書は、資料の整理がついた朝日町遺跡・元町遺跡での発掘調査についてまとめたものです。本書が吹田の歴史を知る一助となれば幸いです。

平成 25（2013）年 3 月

吹田市教育委員会
教育長 西川俊孝

例　　言

1. 本書は、吹田市内において実施した下記の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

吹田市朝日町 1 2 3 1 - 2 朝日町遺跡（通算第1次調査）

吹田市元町 1 1 3 6 - 1 元町遺跡（通算第1次調査）

2. 現地における発掘調査に係る調査経費は工事事業者の負担による。

3. 現地における発掘調査は、吹田市立博物館文化財保護係（現、文化財保護課）賀納章雄・堀口健二が担当し、本文の執筆は賀納が行った。

4. 図中の方針は磁北を示し、標高は T. P.（東京湾標準潮位）を示す。

5. 遺物実測図の縮尺は基本的に 1 / 4 としたが、元町遺跡の石製品については 1 / 2 とした。また本文中の遺物番号は、遺跡ごとに実測図・図版とも統一した。

6. 整理作業には、以下の方々の参加を得た。

佐藤健太郎、花崎晶子、秋山芳恵、小川里美、木船安紀子、高井明美、林裕子

目 次

第1章 位置と環境	1
第2章 朝日町遺跡第1次発掘調査	2
第3章 元町遺跡第1次発掘調査	7

挿図目次

第1図 周辺の主要遺跡分布図	1
第2図 朝日町遺跡調査地位置図	2
第3図 調査区平面図	3
第4図 土層断面図	3
第5図 遺物実測図〔第4層出土〕	4
第6図 遺物実測図〔第5層出土〕	5
第7図 遺物実測図〔第6層出土〕	5
第8図 元町遺跡調査地位置図	7
第9図 調査区配置図	8
第10図 土層断面図	8
第11図 遺構平面図	10
第12図 遺物実測図1	11
第13図 遺物実測図2	11

図版目次

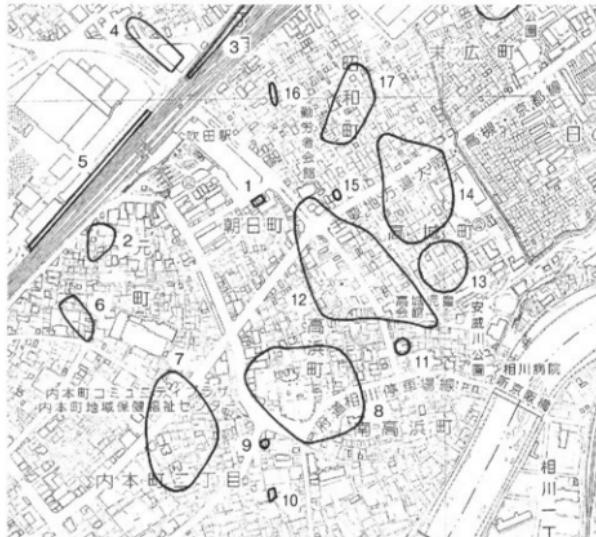
図版 1	朝日町遺跡 1 (調査作業風景／調査区全景)	13
図版 2	朝日町遺跡 2 (調査区南壁／調査区南壁近景)	14
図版 3	朝日町遺跡 3 (出土遺物①)	15
図版 4	朝日町遺跡 4 (出土遺物②)	16
図版 5	朝日町遺跡 5 (出土遺物③)	17
図版 6	朝日町遺跡 6 (出土遺物④)	18
図版 7	元町遺跡 1 (A 区調査作業風景／A 区遺構検出状況①)	19
図版 8	元町遺跡 2 (A 区遺構検出状況②／A 区遺構検出状況③)	20
図版 9	元町遺跡 3 (A 区遺構近景・P10 付近／P10 近景)	21
図版 10	元町遺跡 4 (A 区遺構近景・中央付近／A 区西壁)	22
図版 11	元町遺跡 5 (B 区調査作業風景／B 区落ち込み跡)	23
図版 12	元町遺跡 6 (B 区西壁／B 区西壁近景・南西隅)	24
図版 13	元町遺跡 7 (出土遺物①)	25
図版 14	元町遺跡 8 (出土遺物②)	26
図版 15	元町遺跡 9 (出土遺物③)	27

第1章 位置と環境

吹田市は、大阪府の北部に位置する。市域北側は千里丘陵が占め、南側は主に神崎川や淀川などの氾濫によって形成された平野部が広がり、その北と南とでは対照的な地形となる。

本書で報告する朝日町遺跡と元町遺跡は、ともにJR吹田駅近くの市域南側の平野部に位置する。JR吹田駅付近から南側にかけては、河川起源の沖積堆積物ではなく、縄文海進時に形成されたと考えられている吹田砂堆が広がることが知られているが、朝日町遺跡と元町遺跡においては、その地山層として、神崎川などの沖積作用による軟弱な土砂の堆積層ではなく、また吹田砂堆の砂層でもなく、そこでは千里丘陵の土質に似た比較的縮まった粘土質の地盤が認められる。これは、千里丘陵起源の土砂が何らかの要因で供給されて堆積し形成されたものと考えられるが、同様の縮まった地盤を地山層とする遺跡は他に周辺にもあり、高城遺跡、高城B遺跡、昭和町遺跡、昭和町遺跡B地点、高畠遺跡などがあげられる。おそらく平野部にあっては、河川の氾濫等を比較的受けにくく安定した地点であったのであろう。また、朝日町遺跡・元町遺跡周辺の平野部には他にも高浜遺跡、都呂須遺跡、浜の堂遺跡などが展開しているが、これらは吹田砂堆上に位置し、これらも砂堆という微高地上にあって比較的河川氾濫等の影響を受けにくい地点にあったといえる。

1. 朝日町遺跡
2. 元町遺跡
3. 吹田操車場遺跡
4. 片山遺跡
5. 西の庄東遺跡
6. 浜の堂遺跡
7. 都呂須遺跡
8. 高浜遺跡
9. 宮之前遺跡
10. 宮之前遺跡B地点
11. 神境町遺跡
12. 高城B遺跡
13. 吹田城跡推定地
14. 高城遺跡
15. 昭和町遺跡
16. 昭和町遺跡B地点
17. 高畠遺跡



第1図 周辺の主要遺跡分布図 (S=1/10,000)

第2章 朝日町遺跡第1次発掘調査

1. 調査の経過

調査地は、もともと高城B遺跡の周辺地にあたり、当地にビルの建築が計画されたことにより、平成14（2002）年1月28日に試掘調査を実施したところ、古墳時代～中世にかけての遺物が確認され、新たに遺跡の包蔵地であることが判明し、事業者からの埋蔵文化財発見届の届出により、朝日町遺跡として周知されることになった。そして、予定の建築工事が行われた場合、一部造構・遺物が破壊されると判断されたことから、約35m²の調査区を設定して、平成14年2月4日から2月7日にかけて、重機及び人力掘削によって調査を行った。

2. 調査の成果

（1）基本土層序

調査区の土層序は、現代盛上層〔第1層〕以下、暗灰色砂質土層〔第2層〕、灰色砂質土層〔第3層〕、灰色砂質土（鉄分多く含む）層〔第4層〕、暗灰褐色粘質土層〔第5層〕、暗灰褐色粘土層〔第6層〕、暗灰褐色粘土（より暗）層〔第7層〕、地山層である黄灰色粘土層〔第8層〕の堆積が基本的に認められた。これらのうち、第4層・第5層・第6層中において弥生時代から中世にかけての遺物の包含を確認した。また、第7層については平準に堆積するものではなく、部分的にピット状に第8層へ入り込むような状況で認められ、上位部からの踏込み

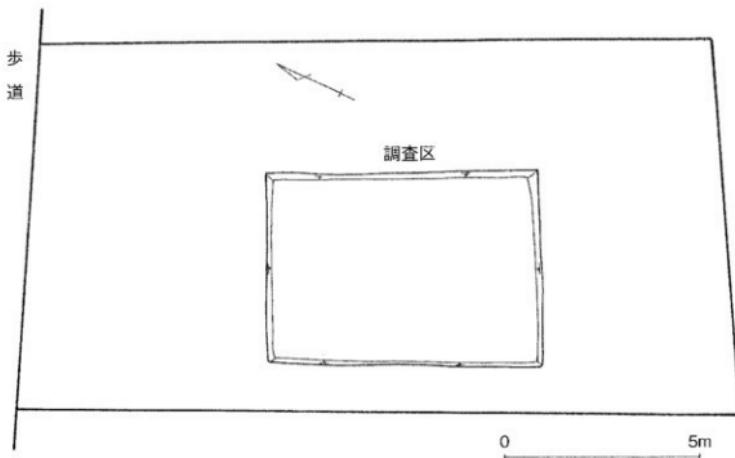


第2図 朝日町遺跡調査地位置図 (S=1/2,500)

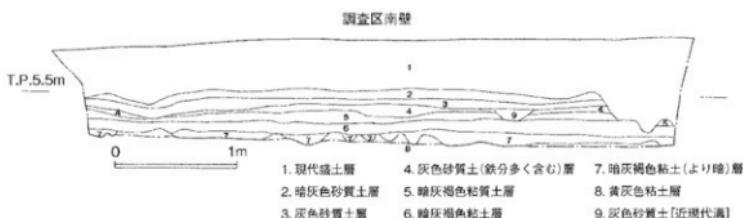
痕や植物痕であろうと考えられる。なお、試掘調査時においては、地山層面上に第7層がピット状に入り込む状況からこれを遺構ではないかとしてとらえてしまったが、今回の発掘調査では、明確な遺構の検出はなかった。

(2) 出土遺物

各遺物包含層からは、弥生時代から中世にかけて時代幅の広い遺物が出土した。また、そのほとんどが小片であった。ここでは小片ながら図化できた遺物を示しつつ、各遺物包含層の出土状況をまとめる。



第3図 調査区平面図

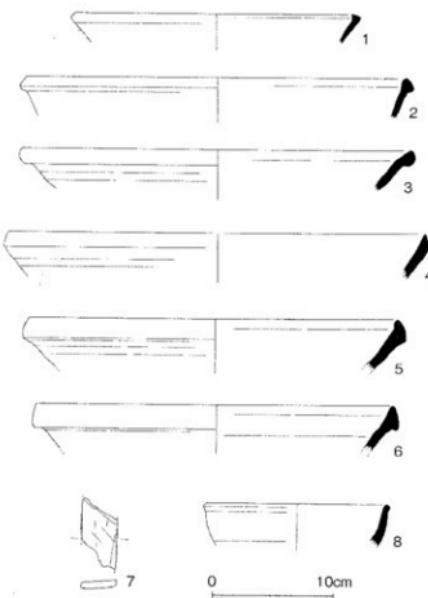


第4図 土層断面図

【第4層出土遺物】

主に平安時代後期から中世にかけての遺物が出土したが、室町時代の遺物の割合が多かった。出土遺物には、平安時代：瓦器、中世：土師器・須恵器・瓦器、瓦質土器・陶器、他に砥石などがあった。

ここで図化できたものみると、1～6は中世の東播系須恵器鉢である。これらは小片であり、図化する際に復元した口径に誤差をもつ可能性はあるが、2～6は復元口径29cm～34cmを測り、口縁端部が拡張するものであり、1は復元口径約23cmと小型で薄手であり、口縁端部が内側に肥厚するものであった。7は砥石である。両端部は欠損しているが、表面及び側面に使用痕が認められる。裏面については、未使用のためかざらついていて使用痕は認められない。その時期は不明である。8は試掘調査で出土した須恵器椀である。内外面に自然釉と思われる釉がかかり、一見灰釉のような見た目をもつが、それが意図的なものなのかどうか、小片のため不明である。また時期については古代のものと考えられるが、詳細な時期の特定は難しい。

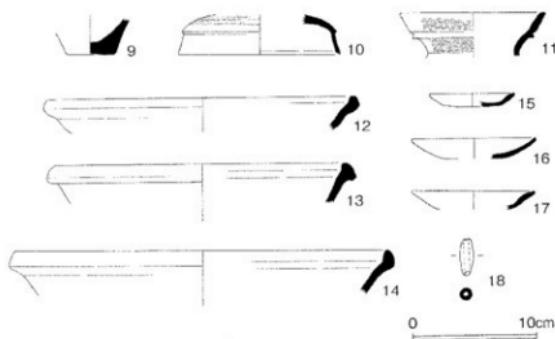


第5図 遺物実測図 [第4層出土]

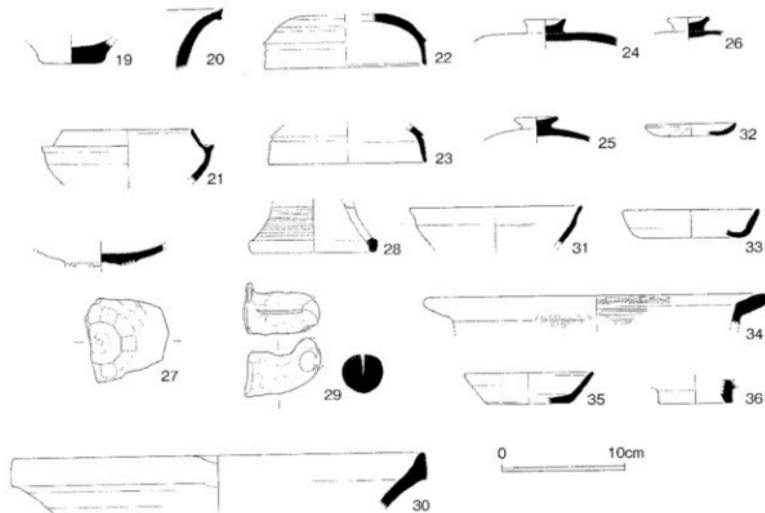
【第5層出土遺物】

弥生時代から中世にかけての遺物が出土したが、鎌倉時代の遺物が比較的多かった。出土遺物には、弥生時代：弥生土器、古墳時代：須恵器・土師器、中世：土師器・須恵器・瓦器、他に青磁、土錘などがあった。

図化できたものをみると、9は弥生土器の甕か壺の底部である。10・11は古墳時代の須恵器で、10は杯蓋、11は縁と考えられる口縁部である。12～14は中世の東播系須恵器鉢である。小片のため復元口径は誤差がある可能性をもつが、12・13は復元口径25cm前後、14は約30cmを測った。15～17は土師器皿である。小片であることと磨耗で調整は不明瞭であるが、形状から室町時代のものとみられる。18は土錘である。時期は不明である。



第6図 遺物実測図 [第5層出土]



第7図 遺物実測図 [第6層出土]

【第6層出土遺物】

弥生時代から中世にかけての遺物が出土したが、古墳時代・鎌倉時代の遺物が比較的多くあった。出土遺物には、弥生時代：弥生土器、古墳時代：須恵器・土師器、平安時代：瓦器、中世：土師器・須恵器・瓦器、他に白磁・青磁などがあった。

図化できたものをみると、19は弥生土器の甕か壺の底部である。20～28は古墳時代の須恵器である。20は甕の口縁部で、口縁端部の下に1条の突帯がつく。21は杯身、22・23は杯蓋である。24～26は杯蓋あるいは高杯蓋の摘み部分である。27・28は高杯である。27は杯部で脚部の透孔の痕が残り、おそらく四方の透孔があったと考えられる。28は脚部で破片一部に透孔の痕跡が残る。29は古墳時代の土師器の甕か瓶の把手である。先端部は欠損しているが、上面部に切り込みが入る。30は中世の東播系須恵器鉢で、復元口径約33cmを測る。31は瓦器碗であるが、磨耗がはげしく、ミガキ等の調整については不明である。32・33は土師器皿で、ともに室町時代のものとみられる。34上師器鍋の口縁部であり、くの字状に開くものである。35は白磁皿で口縁端部が無釉の口禿皿である。36は青磁の碗か皿の高台部分であるが、磨耗のため釉薬が部分的にしか残っていない。

(3) まとめ

今回の発掘調査では、遺構については検出されなかったが、3層の遺物包含層を確認することができた。各包含層には時代幅の広い遺物が含まれ、第4層には室町時代、第5層には鎌倉時代、第6層には鎌倉時代と古墳時代の遺物が比較的多く含む傾向があったが、各層とも室町時代の遺物が下限時期のものとして認められた。おそらく、遺物は認められなかったが、包含層直下の第7層が地山層中に踏込まれたような状況で認められたことから、室町時代において当地は耕作地として利用され、農作業により時代幅のある遺物が攪拌され3層の包含層に含まれていったものと考えられる。現地点で朝日町遺跡において建物跡など集落自体の存在を示す遺構は認められていないが、朝日町遺跡のすぐ南側に広がる高城B遺跡では縄文時代から中世にかけての良好な資料が得られており、今回、朝日町遺跡で出土した資料については、高城B遺跡など周辺遺跡との関わりでとらえる必要があると考えられる。

第3章 元町遺跡第1次発掘調査

1. 調査の経過

元町遺跡は、平成5（1993）年に実施した試掘調査で平安時代の遺構・遺物が検出されたことにより発見された遺跡である。その後、周辺での試掘調査によって遺跡の範囲が拡大していったが、今回の調査まで本発掘調査を実施するには至らなかった。

今回の発掘調査は、元町遺跡の包蔵地内に当たる調査地において共同住宅の建設が計画されたことにより、平成22（2010）年12月8日付けで埋蔵文化財発掘届の届出を受け、平成22年12月16日に確認調査を実施したところ、中世の遺物とともに落ち込み跡が確認された。このことから、予定の建築工事が実施された場合、遺跡が破壊されると判断されたため、工事で影響を受ける範囲において発掘調査を行ったものである。

発掘調査については、平成23（2011）年2月7日から2月25日にかけて重機及び人力掘削によって実施したが、掘削土の置き場の確保の問題から、調査区（82 m²）を北側（A区）と南側（B区）の2つに分けて、A区の調査を実施した後、掘削土を入れ替えてB区の調査を行う形となった。

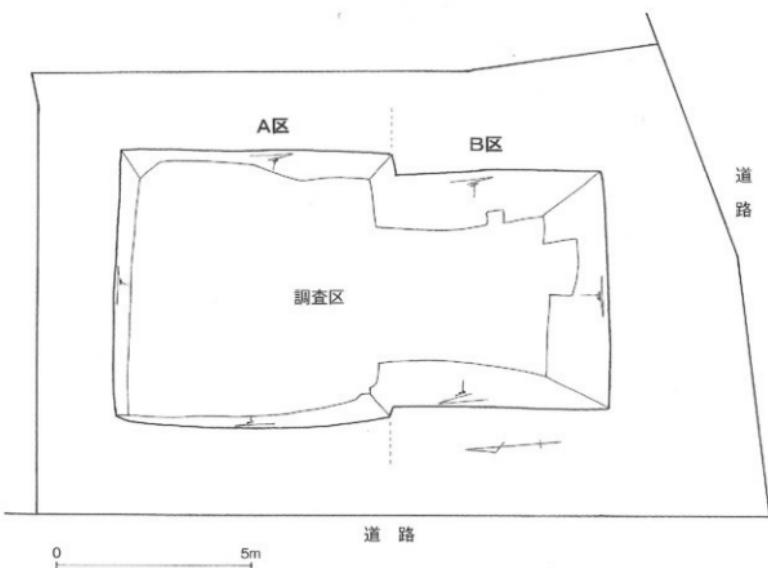
2. 調査の成果

（1）土層序

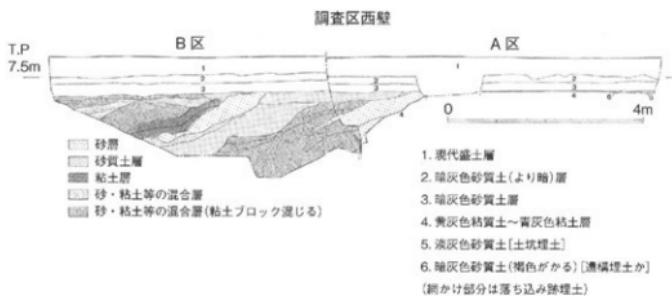
現代盛土層〔第1層〕以下、旧耕土層である暗灰色砂質土（より暗）層〔第2層〕及び暗灰色砂質土層〔第3層〕直下において、地山層である黄灰色粘質土～青灰色粘土層〔第4層〕の堆積が認められた。そして、地山層〔第4層〕をベース層として、ピット・土坑・落ち込み跡等の遺構を検出した。



第8図 元町遺跡調査地位置図 (S=1/2,500)



第9図 調査区配置図



第10図 土層断面図

(2) 検出遺構

調査区の南側の広い範囲を落ち込み跡が占め、落ち込み跡の北側においてピット・土坑が検出された。

ピットは 20 基検出され、その多くが 20 ~ 40 cm 程度の径を測るものであった。それらの深さは確認した範囲で 20 cm 以下のものがほとんどであったが、P10 については径 30 cm、深さ 30 cm を測り、断面観察で柱痕が認められ、柱穴であると考えられる。

土坑については調査区北西隅で 1 基検出された。その平面形はやや溝状の不定形であり、長さ 1.9m 以上を測り、その深さは 3 ~ 10 cm を測った。この土坑については、意図的に掘削されたような痕跡がなく、何らかの要因でくほんだ箇所に土砂が堆積して、土坑として検出されたものと考えられる。

落ち込み跡については、調査区南側の 3 分の 2 ほどの範囲において地山層を掘り込む形で検出された。その深さについては、遺構面から約 1.8m の深さまでを部分的に掘り込むなどしたが、その底面を確認することはできなかった。

落ち込み跡内の埋土は、河川によって運ばれたような土砂の堆積は認められず、砂や粘土が入り混じった土砂、特に人為的に埋められたとみられる粘土ブロックを含む土砂の堆積が主に認められた。

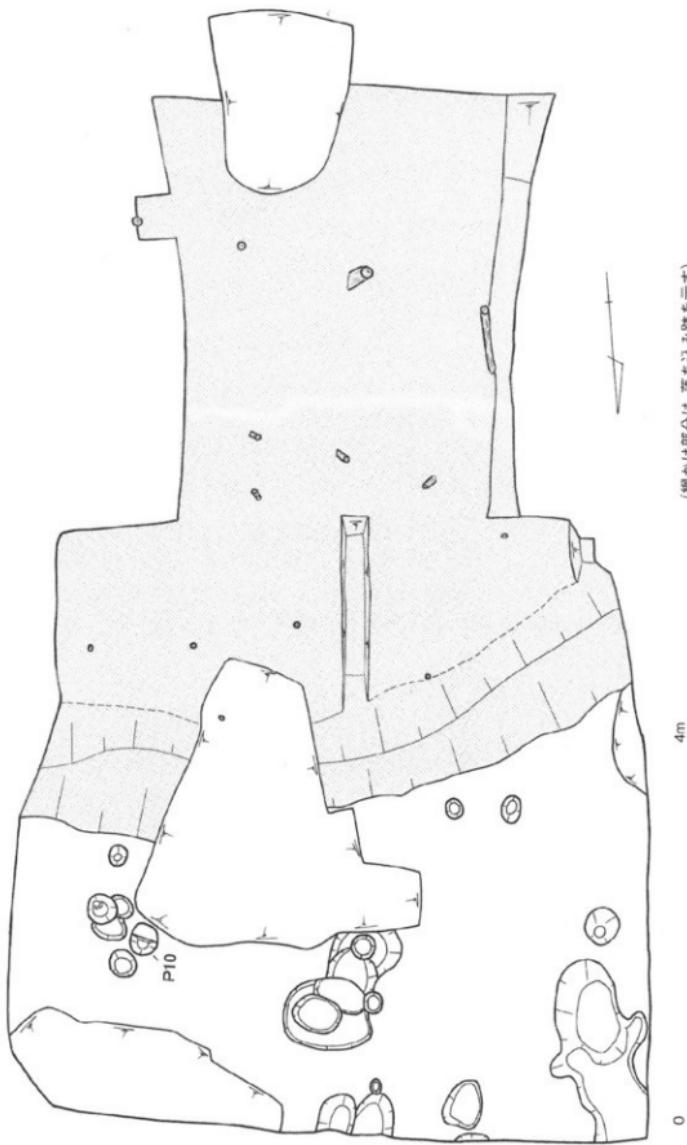
また、落ち込み跡内には、護岸のためと考えられる木杭が列をなして打ち込まれていた。そして、この落ち込み跡の肩部は、検出部分で弧を描くように緩やかにカーブしてのびており、流れの無い中での土砂の堆積という状況等を考えると、落ち込み跡は池跡である可能性が高いと考えられる。

(3) 出土遺物

今回の発掘調査では、落ち込み跡を中心に古墳時代から近世にかけての時代幅の広い遺物が出土した。主な出土遺物では、古墳時代：須恵器、平安時代：須恵器・土師器・製塙土器、中世：須恵器・土師器・瓦器・瓦質土器、近世：陶磁器・瓦・煙管等があった。また、サヌカイト片が 1 点検出され、弥生時代以前のものと考えられる。これらのうち図化できたものを以下にまとめる。

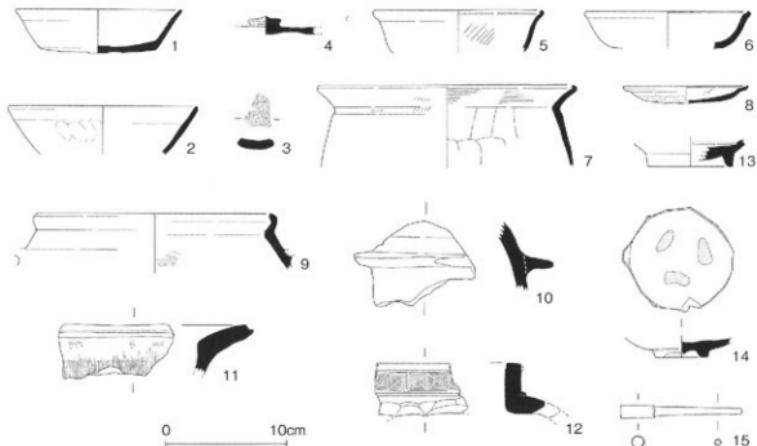
1 は、A 区での遺構面精査時に検出された須恵器杯である。全体的に回転ナデ調整されているが、底部外面は回転ヘラ切り痕が残る。平安時代前期のものとみられる。

2・3 は、P10 出土のものである。2 は土師器椀で、口縁部から内面は横ナデ調整されているが、体部外面の調整は指オサエだけで粗いものとなっている。平安時代中期のものと考えられる。3 は六連式とみられる製塙土器の小片である。内面に目の細かい布目痕が残り、胎土に長石が多く含む。



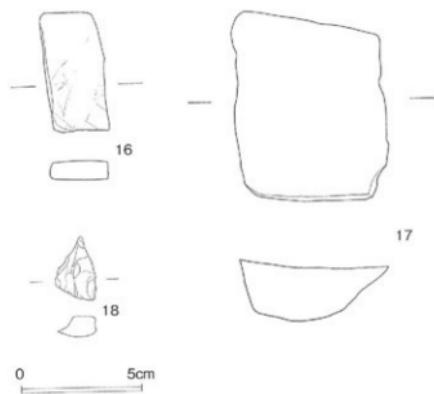
第11図 遺構平面図

(網かけ部分は、落ち込み跡を示す)



第12図 遺物実測図1

4～18は、落ち込み跡出土のものとなる。4～7は平安時代初頭を含む前期のものと考えられ、4は須恵器杯蓋で、摘み部分が残る破片である。5・6は土師器杯である。2点とも小片であり、全体の調整は不明であるが、残存部分で横ナデ調整されている。5の内面には放射状に施されたと考えられる暗文がみられる。7は土師器壺である。残存部において体部外面に縦方向のハケ調整がなされ、口縁部内面もハケ調整が認められる。



第13図 遺物実測図2

8は平安時代中期の土師器皿である。底部外面は指オサエとやや雑なナデ調整による。

9・10は土師器羽釜である。9は口縁端部が内側に屈曲するもので、残存部分では横ナデ調整されている。10は鈎部分のみが残るもので、磨耗がはげしく調整は不明瞭である。2点とも平安時代後期頃のものと考えられるが、10についてはもう少し時代が下る可能性がある。

11は土師器壺の口縁部である。口縁端部が外方へつまみ出されるようにのびる。平安時代中期頃のものと考えられる。

12 は瓦質土器風炉である。体部から口縁部にかけての破片であるが、直立する口縁部外面にはスタンプ文が施されており、体部には火窓の痕跡が残る。室町時代のものである。

13 は中国製白磁である。椀の底部であるが、残存部分で外面は露胎となっている。

14 は近世の国産青磁である。見込み及び畳付にそれぞれ 3か所に砂目が残る。

15 は煙管の吸い口である。銅製であり、銅板を巻いて作られた痕跡である縱方向の 1 筋の継ぎ目が残る。銅の厚みは 1mm に満たない。

16 は砥石である。図面の下端面と右側面は欠損しているが、他の面には使用痕である擦痕が認められる。泥板岩である。

17 は一部磨製されている緑泥石とみられる石製品である。図面裏面は原礫面となるが、表面と上下端面は磨かれており、特に表面はよく磨かれている。砥石とみられるが、裏面がまったく加工されていないことから、他の用途を目的としたものである可能性も考えられる。

18 はサスカイトの剥片である。16 ~ 18 についての時期は不明であるが、18 は弥生時代以前のものと考えられる。

この他、石製品に関しては、図化していないが、落ち込み跡からは滑石の小片なども検出された。

3. まとめ

今回の発掘調査では、時代幅の広い遺物とともに、ピットや土坑、落ち込み跡などの遺構を検出した。ここで出土した遺物の多くは、池跡と考えられる落ち込み跡内からのもので、古墳時代から近世までのものが含まれていた。このことから、落ち込み跡は、主に近世において機能していたものであり、それが埋まる過程において落ち込み跡周辺に存在した古墳時代から中世の遺物を多く含む土砂が堆積していったものと考えられる。

また、落ち込み跡の北側で検出されたピットや土坑に伴って出土した遺物はそれほど多くなかったが、遺構出土の遺物についてはすべて中世以前と考えられるもので、近世以降の遺物は含まれていなかった。遺物実測図 2 の土師器椀は、柱穴の可能性が考えられる P10 からの出土遺物であり、平安時代に相当するものと考えられる。また、落ち込み跡内の出土遺物にも比較的多く平安時代のものが含まれていた。このことから、今回検出したピットには、P10 以外にも平安時代に相当するものがあると考えられ、調査地近辺に平安時代の建物跡が存在する可能性も考えられる。また、古墳時代や中世の遺物についても多数認められていることから、この周辺に古墳時代から中世の集落跡が展開している可能性もあると考えられる。

以上のように、今回の発掘調査では、池跡と考えられる近世の落ち込み跡や、平安時代の建物跡の存在の可能性を示すピット、また近辺に集落跡の存在を想起させる古墳時代から中世にかけての多くの遺物を資料として得ることができた。



調査作業風景（南から）



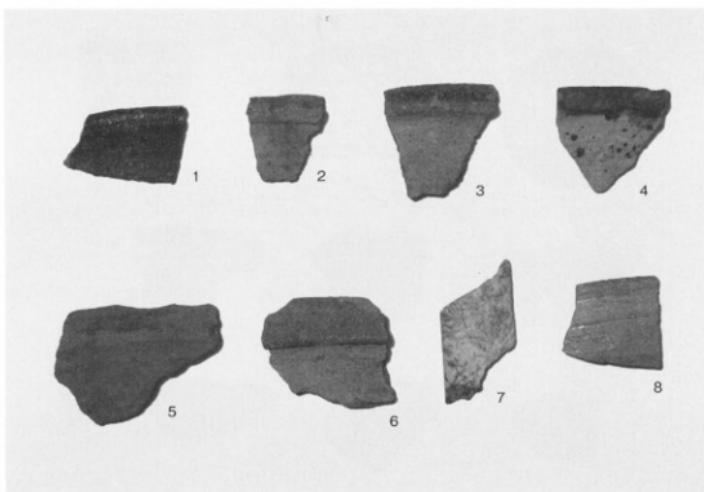
調査区全景（南から）



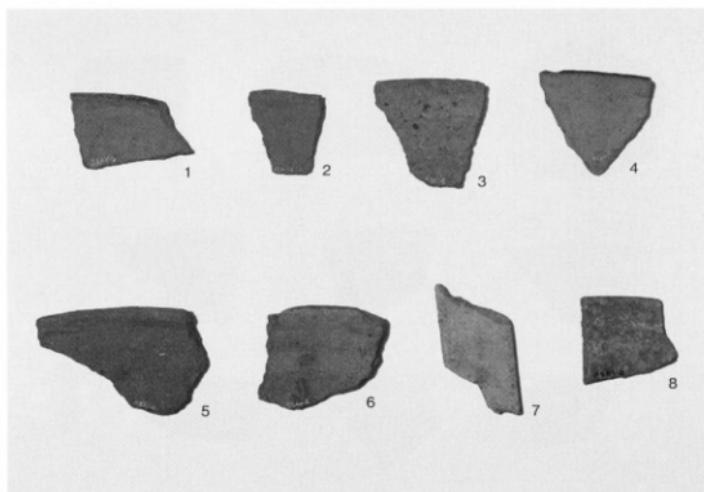
調査区南壁（北から）



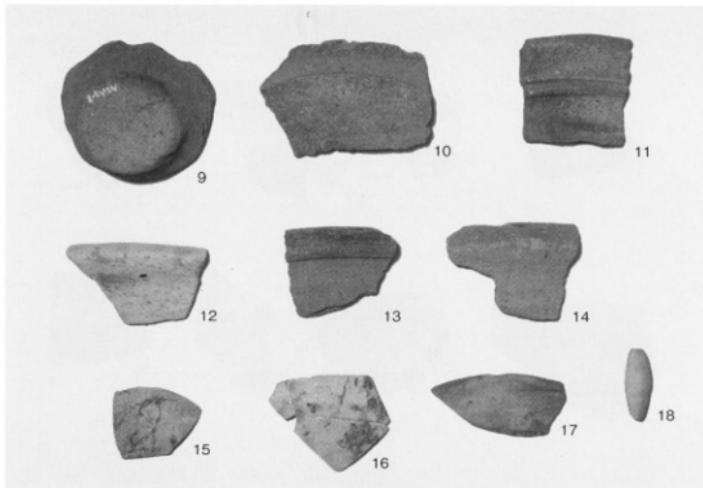
調査区南壁近景（北から）



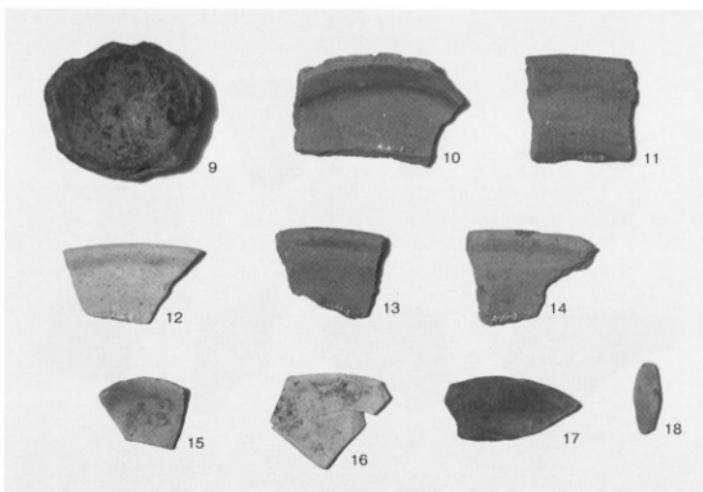
出土遺物①



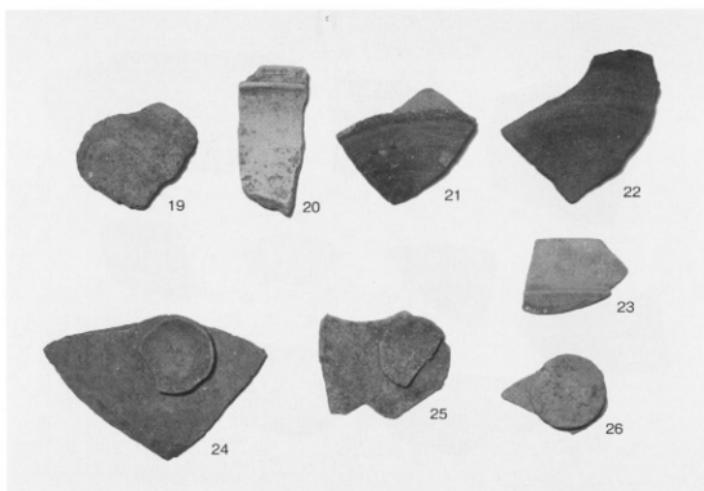
出土遺物①



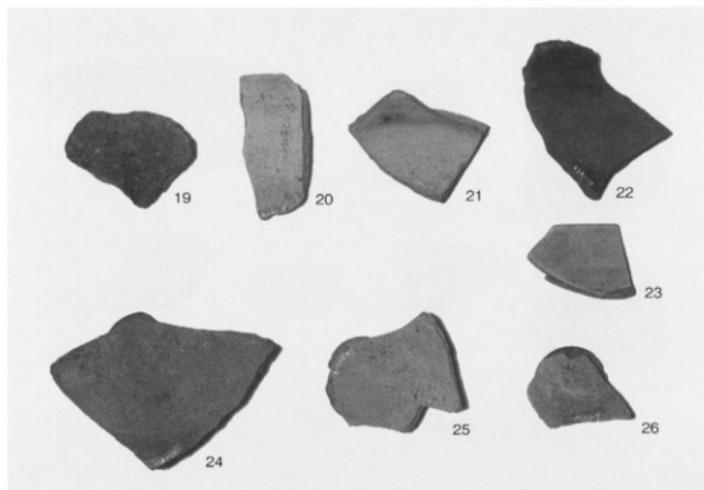
出土遺物(2)



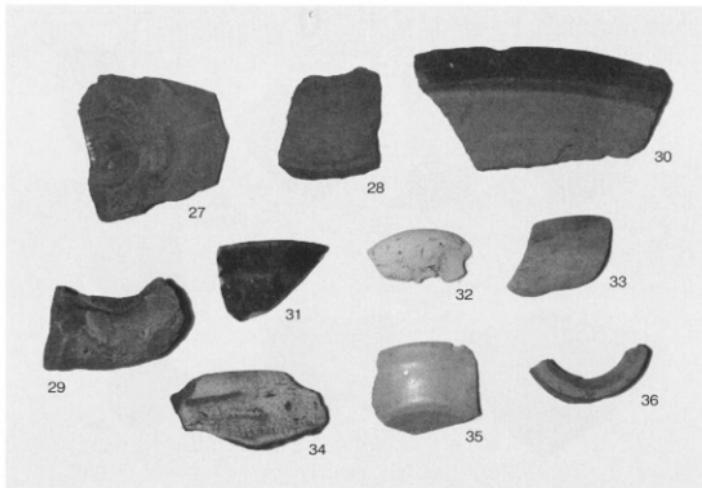
出土遺物(2)



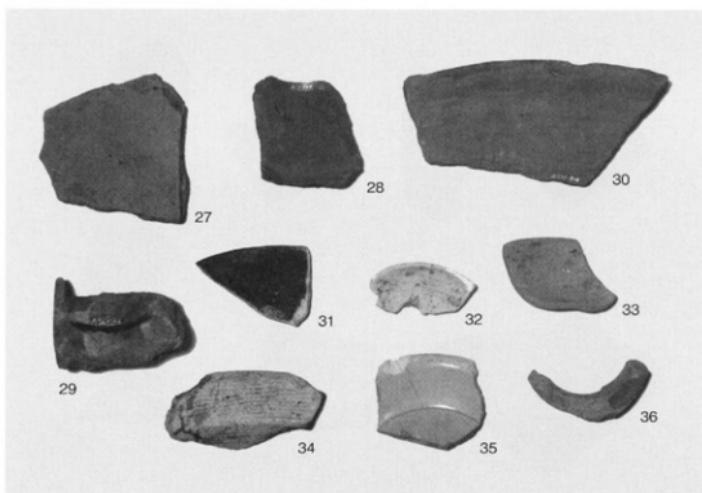
出土遺物③



出土遺物③



出土遺物④



出土遺物④



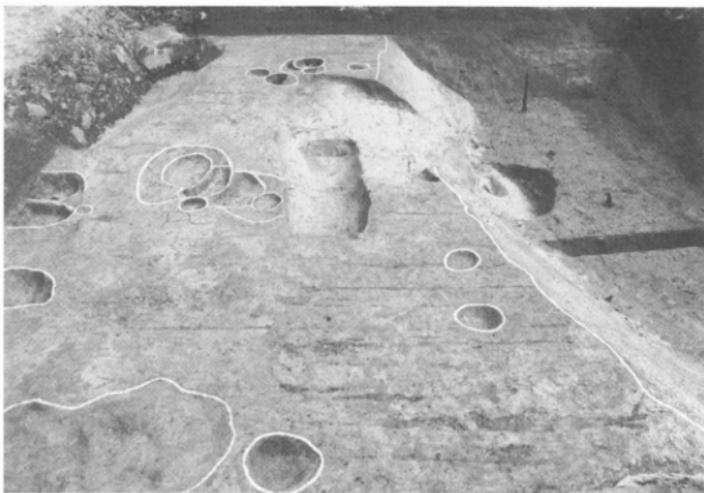
A区調査作業風景（西から）



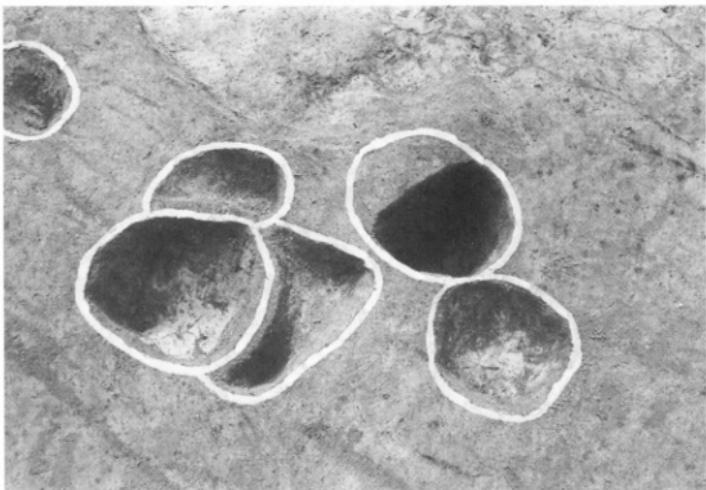
A区遺構検出状況①(南から)



A 区遺構検出状況②(東から)



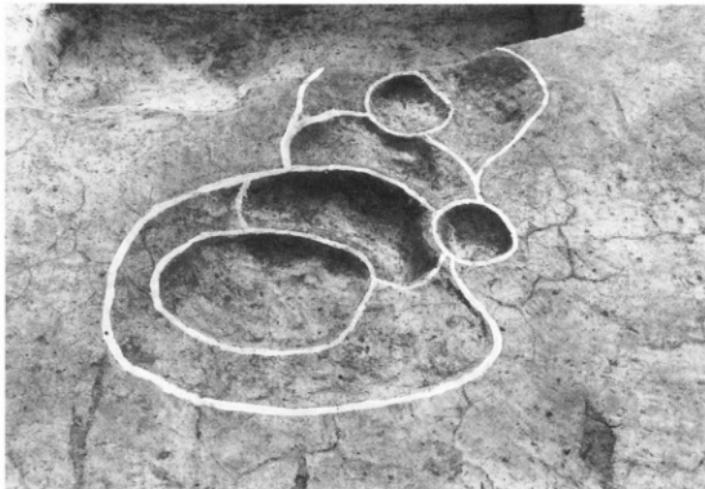
A 区遺構検出状況③(西から)



A区遺構近景・P10付近（北東から）



P10近景（北から）



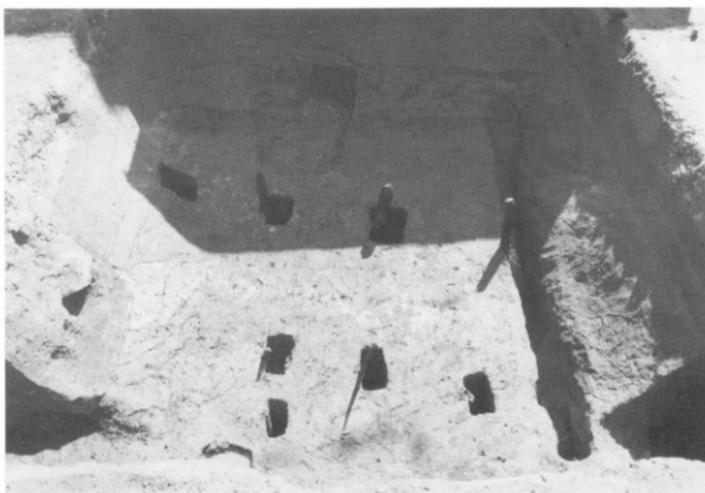
A区遺構近景・中央付近（北から）



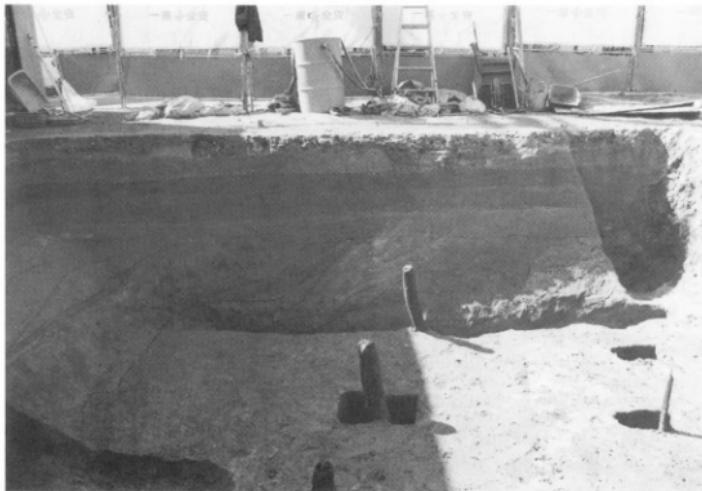
A区西壁（東から）



B区調査作業風景（南東から）



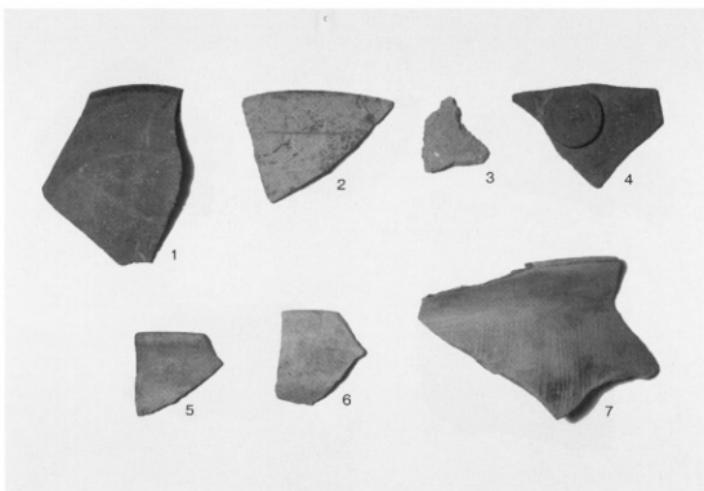
B区落ち込み跡（北から）



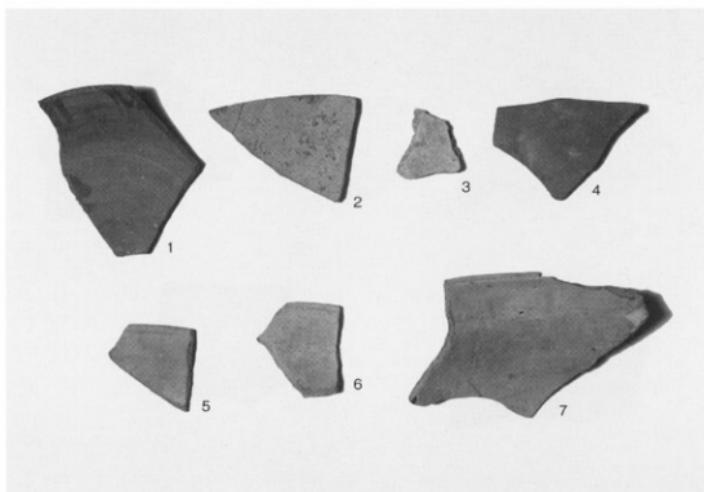
B区西壁（東から）



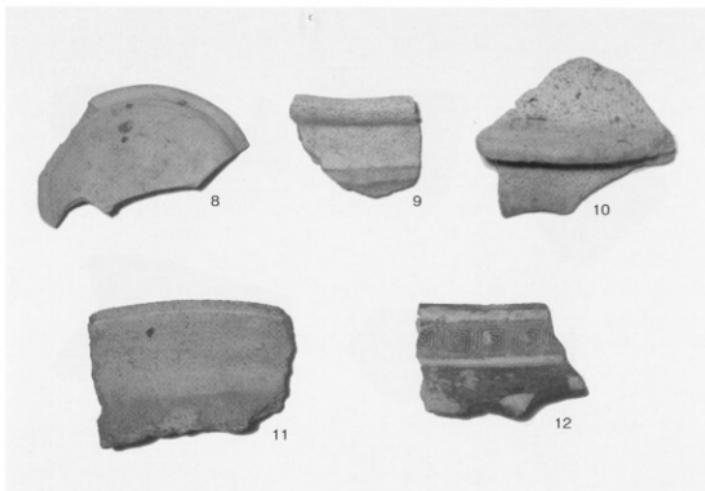
B区西壁近景・南西隅（東から）



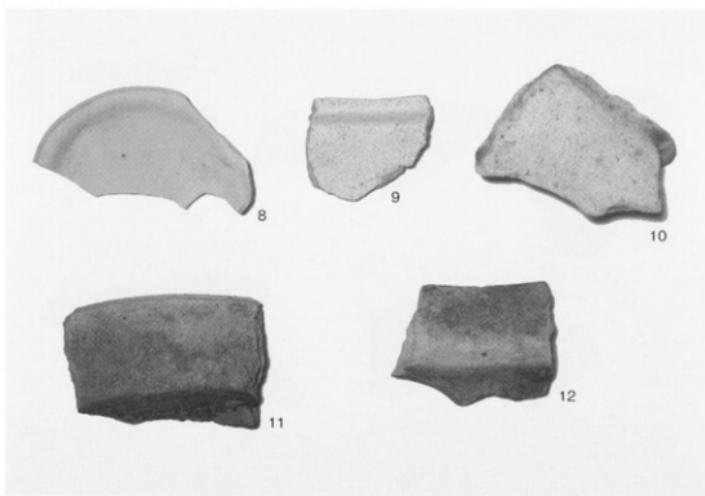
出土遺物①



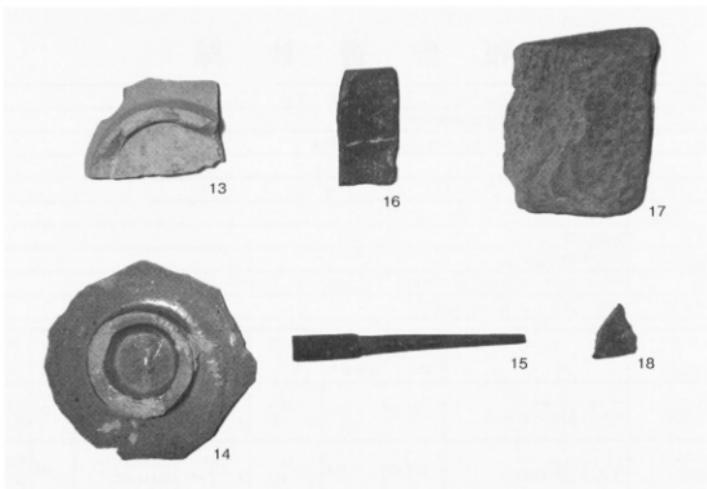
出土遺物①



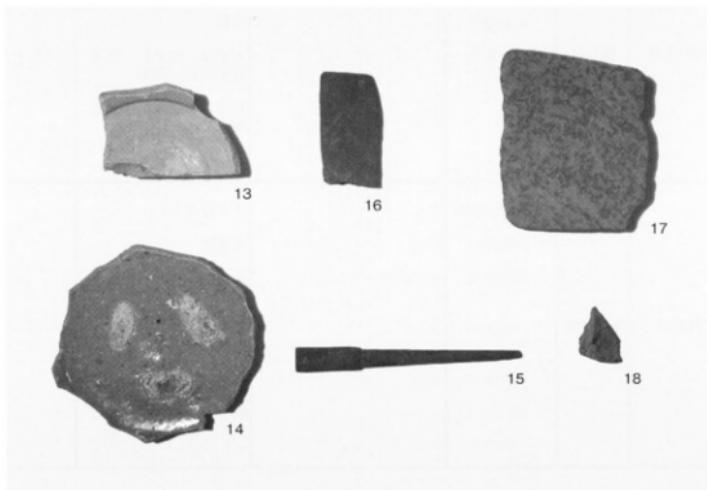
出土遺物②



出土遺物②



出土遺物③



出土遺物③

報告書抄録

ふりがな	すいたしまいぞうぶんかざいはくつちょうさほうこくしゅう 2							
書名	吹田市埋蔵文化財発掘調査報告集 2							
副書名	朝日町遺跡第1次調査 元町遺跡第1次調査							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編集者名	賀納章雄							
編集機関	吹田市教育委員会							
所在地	〒561-8550 大阪府吹田市東泉町1丁目3番40号 TEL(06)6384-1231							
発行年月日	西暦 2013年3月31日							
所取遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北 緯 ○' ″	東 緯 ○' ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あさひましいせき 朝日町遺跡	すいたしまあひまち 吹田市朝日町1231-2	27205	144° 45' 44"	34° 31' 34"	135° 31' 24"	20020204～ 20020207	35	記録保存 調査
もとましいせき 元町遺跡	すいたしもとまち 吹田市元町1136-1	27205	114° 45' 41"	34° 31' 21"	135° 31' 21"	20110207～ 20110225	82	記録保存 調査
所取遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特記事項	
朝日町遺跡	散布地	弥生時代 古墳時代 平安時代 中世	なし		弥生土器 須恵器、土師器 瓦器 土師器、須恵器、瓦器、 瓦質土器、陶器 青磁、白磁、磁石、土 鏡	なし		
元町遺跡	集落遺跡	弥生時代以前 古墳時代 平安時代 中世 近世	なし なし 柱穴、ピット なし なし		サヌカイト 須恵器 須恵器、土師器、製塙 土器 須恵器、土師器、瓦器、 瓦質土器 陶器、瓦、煙管 磁石	なし		

吹田市埋蔵文化財発掘調査報告集 2

朝日町遺跡第 1 次調査

元町遺跡第 1 次調査

平成 25 (2013) 年 3 月 31 日

編集 吹田市泉町 1 丁目 3 番 40 号

発行 吹田市教育委員会

この報告集は、300 部作成し、1 部あたりの単価は 578 円です。

